

と 都市を時の層でとらえる

どういう都市が良い都市なのか。この問いに対しては著名な本がいろいろある。それを、自分なりに考えたのは歴史的環境の保全を訴える住民運動に深く関わっていた学生時代だった。当時、歴史的環境の保全は文化財保護の視点や都市のアイデンティティを継承する視点と、都市の更新を促す開発の視点とが対立する状況にあり、前者はややもすると情緒的主張として退けられがちであった。この問題を開発か保全かという択一論ではなく、都市の更新と歴史的環境の保全を、良い都市とは何かという問いのなかで位置付けられないかと考えたのだ。

都市の物的ストックを時間軸と合わせて把握し、それが時間の経過とともにどのようなベクトルで変化するかというのをモデル的に示した「都市の時層構成論」がそれだ。ニュータウンなどでは、物的ストックは直近の限られた時間軸に集約される。一方、フオロロマーノのような廃墟では物的ストックは遙か昔の限られた時間軸に集約される。一般の都市はその間に位置するのだが、そこには更新により直近の時間軸に位置するストックもありながら、出来てからの年数の経過により様々な時間軸にストックが分散され集積されている。金沢の歴史的街並みの建物の築年数を調べた調査事例をもとに、横軸にストックを縦軸に時間を下を現在、上を過去としてプロットすると、お腹がデブプリと太った人のシルエットのようになる。一定年数が経過したストックをピークに現在から緩やかに膨らんだカーブを描くのだ。このようなお腹が出たようにストックが時間的蓄積をもつ都市が、成熟した良い都市とは言えないか。更新の量とスピードが激しいとニュータウンのようになってしまう。古いストックをそのままにしておくといずれ廃墟のようになってしまう。

都市の時層構成のバランスを維持する適度な更新が健全な成熟をもたらす。それは、建物などの建替えだけが選択肢になるわけではなく、築年数を経た建物に手を加えて現代的な要素を表出させるリノベーションもバランスを維持する手法になる。さらにエリアマネジメントの取組により古いストックに新しい出来事を起こしていくのも含まれよう。そのように都市を時の層でとらえてみるのも面白いのではないか。